

## はじめに

本書で取り上げる話題は人間の「創造性」である。その狙いは、旧来の創造性観がとらわれてきた数々の固定観念や誤解からの脱却にある。例えば、創造性は「卓越した才能の持ち主や孤高の天才が、その才能で地道な努力を伴わず突然に発揮するもの」と思っている人も多いのではないだろうか。確かに創造性というと、何か神秘的な響きとともに、デザイナーやアーティスト、起業家、発明家などが持つ卓越した才能のようなものをイメージするかもしれない。しかし、近年の認知科学とその関連分野の研究の蓄積からは、そうした「神秘的」で「卓越した才能」という創造性像からは大きくかけ離れた創造性の正体が明らかになりつつある。少なくとも科学的研究の対象になっている時点で「神秘的」なものではないし、限られた「卓越した才能」の持ち主だけのものでもない。では創造性はどこから訪れるのか、その原動力はどこにあるのか、どうやって生み出されるのか、本書ではこれらの疑問に焦点を当てる。

本書の流れとしては、第1章でこれまでの創造性をめぐる議論を概説する。今日の認知科学における創造性観が、神秘的なものから科学的なものへと移り変わる契機となった諸研究を紹介していきたい。それらの研究の中でも特に大きなインパクトを与えたのは、第2章で取り上げる潜在処理過程、いわゆる「無意識」の研究である。誰の心にも突発的に訪れる創造性の発露「ひらめき」は、何の前触れもなく誰かから送りこまれるものではない。本人すら自覚できない着実な進歩が潜在的に進んでいるため突然のように感じられる、というのが現在最有力と考えられている「ひらめき」の正

体である。しかし、これは「ひらめき」が突然生じたように感じられることの説明であり、創造性の一側面でしかない。また、「アイデアは誰かから送り込まれるものではない」とは述べたが、完全に一人の心の中で生まれてくるものでもない。創造性は一個人の才能といったものではないだけでなく、他者や環境の助けを受けて発露するものということも明らかになっている。第3章ではこうした創造性に関与する外的資源について触れ、第4章ではその中でも特に影響の大きい、他者との協同について取り上げる。創造的思考は自分でも自覚できない心の奥底たる潜在処理でも進む一方、環境や他者からの助けを受けながら展開していく。このとき、思考する私たちの心と環境の両者をつなぐのが第5章で取り上げる身体である。創造的思考は、腕を組んで座り込み、じっとして難しい顔をしながらするものではなく、むしろ、いろいろな場所で右往左往して、大げさな身振り手振りをしながら悩んでいるうちに進んでいくものである。

旧来の創造性研究では、脳の様子や生み出されたアイデアそのものに目を向けがちで、こうした何気ない身体やその動作の関与は見落とされがちであった。しかし近年の身体性認知科学研究では、こうした身体動作やリアルタイムにその場で感じ取る感覚情報が私たちの判断や思考を左右する場面があることも報告されている。このことは創造性も例に漏れない。そうなると、私たち一人ひとりの身体の違いが、アイデアの着想の仕方をも左右する可能性がある。それだけでなく、同じ人間でも怪我や病気によって身体の状態が変わってしまうこともあれば、道具を身体の一部のように使ってさまざまな作業をこなすこともある。近年ではVR（バーチャルリアリティ）によってさまざまな身体になりきる体験もできるようになった。こうした身体のあり方が創造性に与える影響について、第6章で触れていく。

これらの各章で紹介する知見から、私たちの創造性は心の内外を問わず、さまざまな要因に支えられ、惹起されていることを伝えられれば幸いである。私たちの創造性は、傑出した誰かの心のどこかに局在するものではなく、ひろく私たちの心と環境、そしてその間をつなぐ身体に分散し、遍在するものだということが、筆者が最も伝えたいメッセージである。これについては終章で改めて詳述したい。